

中世「なぞなぞ」の発想法について

著者	岡野 幸夫
雑誌名	鳥取短期大学研究紀要
号	56
ページ	117-126
発行年	2007-06-01
出版者	鳥取短期大学
ISSN	1346-3365
URL	http://doi.org/10.24793/00000170



中世「なぞなぞ」の発想法について

岡 野 幸 夫

Yukio Okano : Methods of Conception of Riddles in the Muromachi Period

室町時代の「なぞなぞ」本「なそたて」に見られる「なぞなぞ」を、発想法の観点から分類し、考察する。その結果、「なぞなぞ」の問題文中の文字列を「操作」することで答が得られる発想法によるものが最も多いことが判った。また、平安時代の「なぞなぞ」の発想法とはかなり様相が異なっていることも判った。

キーワード…なぞなぞ 室町時代 「なそたて」 発想法

一、はじめに

「なぞなぞ(riddle)」は、多くの文化圏に存在すると言われている。^(注1)

日本では、確認できる最古の文献として平安時代のもがあり、文字には記録されなかった一般民衆による「なぞなぞ」の存在も考慮すれば、長い歴史を持つ言語文化であると考えられるが、その歴史的研究はまだ充分になされているとはいえない状況にある。

「なぞなぞ」は、まず、口頭伝承としての側面が注目され、柳田國男がフィールドワークに基づき民俗学的な考察を行った。^(注2)その後、言語文化として本格的に研究したのは鈴木棠三である。^(注3)また、鈴木の研究

究に基づき「なぞなぞ」の歴史を略述した小野恭靖の研究もある。^(注4)その他に、個々の「なぞなぞ」文献所収の「なぞなぞ」の解を考察・記述した研究や、新資料の紹介などがある。すなわち「なぞなぞ」の歴史的研究は鈴木・小野の独擅場になっていることが判る。しかし、鈴木の研究も、文献資料の制約から脱しきれていないように見える。即ち、各時代において偶々文字に記録された資料に基づき、それらを繋ぎ合わせるでも「歴史」記述とはならないのではないかと、時代を超えて適用可能な「ものさし」が必要なのではないか、と思われるのである。

本稿では、まず、鈴木・小野の研究に導かれつつ、「なぞなぞ」の歴史を略述し、「なぞなぞ」の歴史的研究を行うための見通しを得る。その後、室町期の「なぞなぞ」本に見られる「なぞなぞ」の出題の発

想法を整理分類することを試みる。これにより、先人がどのような「なぞなぞ」を作ってきたのかについて、同一基準で比較考察できるように考えると考える。資料として取り上げる文献は、天理図書館蔵『なぞたて』（注3『中世なぞなぞ集』所収）である。この文献は、「永正十三年正月廿日（花押）」の奥書を持ち、後奈良院の宸筆かとされている。全一九六題（うち番外二題を含む）の「なぞなぞ」を収める。これらの「なぞなぞ」を、発想法の違いで分類し、考察を加える。

二、「なぞなぞ」の歴史略述

本節では、時代を追って「なぞなぞ」がどのような姿で現れているかを略述し、「なぞなぞ」の歴史的研究のために必要な見通しを得たい。

【奈良時代】

奈良時代中期に成立した「萬葉集」には、「なぞなぞ」的な要素を含む歌が数多く存在する。周知のように、「萬葉集」は平仮名・片仮名の出現以前に成立した文献であり、萬葉仮名による表音的な表記を除けば、漢字表記の字面を訓読して読解する必要がある。その際、音数律（和歌の定型）や他の箇所に見られる類似表現などを補助的手段として訓読するのであるが、その訓読には種々の困難が伴い、現在でも訓読が確定していない歌や、そもそもどう読むべきなのかすら判らない歌も残っている。「なぞなぞ」的な要素を含む歌の中で、有名なものを一、二挙げてみる。

①垂乳根之 母我養蚕乃 眉隱 馬聲蜂音石花蜘蛛荒鹿 異母二不相而
(卷第十二・二九九一歌)

（たらちねのははがかふこの まよごもり いぶせくもあるか
いもにあはずして）

これは、形容詞「いぶせし」の連用形「いぶせく」に係助詞「も」、補助動詞「あり」、係助詞「か」が接続した「いぶせくもあるか」を「馬聲蜂音石花蜘蛛荒鹿」と表記したものである。馬のいななきを「い」、蜂の羽音を「ぶ」、海中の岩石に花のように付着する甲殻類の「せ（カメノテ）」を「石花」などと表記している。

②（前略）毎見 戀者雖益 色二山上復有山者 一可知美（後略）

（卷第九・一七八七歌）

（みるとに こひはまされど いろにいでは ひとしりぬべ
み）

これは長歌の一部である。「出」という漢字を「山+山」と分解して「山上復有山」と表記したものである。

このような文字遣いは、文飾、あるいはことば遊びの意識を持ったものと考えられ、「戯書」と呼ばれている。戯書にはさまざまな種類があり興味深いのであるが、本稿の趣旨からは外れてくるのでこれ以上は立ち入らない。但し、本稿の立場から一言すると、このような表記は、文献の成立当時は誰にでも読み解けたかもしれないが、後代の読者には理解できない部分が生じてくるわけで、その意味では編纂者が読者に投げかけた「なぞなぞ」であると位置付けることができる。

あるいは、文献の成立当時から読者に対してなぞを投げかける趣旨もあったかもしれない。戯書に関する研究としては、各種全集類の解説に見られる概説の他、管見に入ったところでは星野五彦「万葉に見る戯書」がある。また、平安時代の文献になるが、『古今和歌集』には、「萬葉集」に見られたような、漢字を用いたことば遊びに類した和歌

が収められている。

【平安時代】

平安時代になると、「なぞなぞ」が具体的な文献の中で確認できるようになる。宮廷貴族の間で「なぞなぞ」合せが行われたことが文献で確認できる。当時、歌合せをはじめ、根合せ、貝合せ、絵合せなど、さまざまなものを左右の二チームで対戦させ、優劣を争う文化的競技が流行したが、「なぞなぞ」合せもこれに類するものである。「枕草子」にも「なぞなぞ」合せについての記述がある。^(注6)次に「なぞなぞ」合せの文献として、『故小野宮右衛門督齊敏君達歌合』の一部を示す。

左 なぞく、この頃古めかしき香するもの

3 いそのかみ古めかしき香するものは花橘のにほひなるべし

右 あづまの方に開けたるもの

4 東路のしづのかきねの卯花をあやなく何と問ふぞはかなき

左右、そのこととは思ひ得ながら、ことの始めに勝つ負けと言はじとにやありけむ。かたみに「知られず」とて、解かずなりぬ。持に定めて、おのが方へ解く。左は、「昔のことの忘れ難ければ、花橘にやあらむ」、右は、「山賤の垣根なる卯の花にや」とて、持に定めつ。

これは、「なぞなぞ」と答の和歌をあらかじめ準備しておき、お互いに「なぞなぞ」を出し合つて当てる競技である。答を和歌に詠み込んでおき、後で証拠として提出したものと考えられている。この文献については、石川廣の研究^(注7)がある。

「なぞなぞ」の解としては、左のものは『古今和歌集』の著名な歌「五月待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする」をふまえたもので、「なぞなぞ」合せが行われた四月下旬にふさわしい内容である。

「昔を思い出させる香り」から「花橘」を連想させるものである。右のものはパズル的で、方角を十二支に当てはめるのである。東は卯の方に当たるので、後半の「開けたるもの」から「花」を連想すれば、答が得られる。

【鎌倉時代】

鎌倉時代末期に成立した『徒然草』の第六二段には、幼少の内親王が父院に「なぞなぞ」の和歌を送った話が収められている。

延政門院いときなくおはしましける時、院へ参る人に御言つてとて申させ給ひける御歌、

二つ文字 牛の角文字 すぐな文字 ゆがみ文字とぞ 君は覚ゆる 恋しく思ひ参らせ給ふとなりけり。

これは、和歌の各句から「こ」「い」「し」「く」を導き出す「なぞなぞ」である。

【室町時代・桃山時代】

この時代になると、「なぞなぞ」を書き留めた文献がまとまって現存するようになる。また、中御門宣胤の日記『宣胤卿記』に「なぞなぞ」を作ったことが記録されている。

(前略)又以元長被仰下云、なぞく当座各令新作、可申入云々、乍迷惑加思案、則申入處、有観感、又有製作被尋下、各解申也、余殊有御感、小折三合被下之、可謂面目、祝着々々、左注、(後略) (文明十三年二月二日条)

これは、後土御門天皇より「なぞなぞ」を新作して奏上するよう命があり、それぞれ申し上げ、天皇からも御作が出題されたことの記録である。記主である宣胤の「なぞなぞ」が特に観感を得、また、天皇の出題に対する解答にも観感を得、褒美をもらった、と誇らしげな記述

である。

この時代までの「なぞなぞ」は、天皇を中心とする宮廷貴族の間で行われていたものの記録ばかりである。そのため、和歌や連歌など、韻文との結びつきが非常に強い。ところが江戸時代以降、一般民衆による「なぞなぞ」が文献に現れるようになり、そのために「なぞなぞ」の担い手が変化したかのような印象を受けるかもしれないが、実際はそうではなく、文字には記録されない世界で、「なぞなぞ」は脈々と生き続けてきたものと思われる。但し、後述するように、連歌の知識を駆使した「なぞなぞ」は、連歌を行っていた識字階級のものであったろう。

【江戸時代】

従来の「なぞなぞ」の形式が「問」と「答」からなる「二段なぞ」であったのに対し、この時代に「……とかけて……と解く。その心は……」という形式の「三段なぞ」が現れ大流行する。それに伴い「二段なぞ」は衰退する。これは「なぞなぞ」歴史上の一画期と言えると考えるが、この現象をどう解釈するかについて、鈴木は『なぞの研究』（注3文献）の中で次のように述べている。

古い「二段なぞ」においても、解き方の説明を、その心は、などという詞で説明した例が見られた。いわば第三段は潜在したのである。それを表面に出して、その機能を最大限に發揮させたのが「三段なぞ」である。

（第七章「古典なぞの衰退」一六五頁）

これは概ね首肯できる考えであるが、私見を付け加えるならば、「三段なぞ」の発生には、「二段なぞ」の複雑化・抽象化がその背景にあったと考えたい。すなわち、室町時代の「二段なぞ」の中には、一つの

問で複数の答が出てくるような「なぞなぞ」や、問を見ただけでは何をどう考えたら答が出てくるのか見当もつかないような「なぞなぞ」がまま見られるのである。こうなってくると、問を出す側と答える側、という従来の「なぞなぞ」行為の構図が成り立たなくなってくる。そのうちに、問と答をセットで出し、なぜその問からその答が出るのか、その道筋を考えさせる、というような楽しみ方が起こってきたのではないだろうか。これは現段階では単なる推測だが、今後さらなる考究に努めたい。

また、江戸時代末期には、画像を用いた「なぞなぞ」が流行する。このことは、ことわざ・慣用句にも同様な現象が見られ、私見では「言語文化の視覚化現象」とでも仮称すべき動きを示している。これについても論すべき課題は多いが、別稿に期したい。

以上、各時代の「なぞなぞ」について概観した。一見して、和歌を中心とする韻文との結び付きが強く認められる。これは、文字に記録された「なぞなぞ」の主な担い手が天皇を中心とする宮廷貴族であることに起因する。室町時代の「なぞなぞ」本にも、和歌形式の「なぞなぞ」が数多く収録されている。江戸時代の「なぞなぞ」本ではこういった形式がどの程度用いられるか、調査の必要を感じる。江戸時代に文字に記録された「なぞなぞ」の主な担い手は一般民衆であり、担い手が前の時代とはずいぶん異なっている。この違いになるべく影響を受けないで、できるだけ同じ基準で「なぞなぞ」を比較検討するには、やはり出題の発想法を用いるのが良いのではないかと考える。次節では、発想法により「なぞなぞ」の分類を試みる。

三、中世「なぞなぞ」の出題の発想法

本稿では、時代やジャンルを超えた「なぞなぞ」の比較考察のための「ものさし」として、発想法に注目する。どのような発想でそれぞれの「なぞなぞ」が作られているか、を考察の基準とするのである。

『なそたて』所収の「なぞなぞ」全一九六題を検討した結果、以下の三種類の発想法が見られた。

①言い換え

「問」を、それと等価の表現と置き換えることで「答」を得るものである。

(例) (問) 三里はん (答) よりか、り

これは、距離が三里半なら、それは四里にかかっている、という「言い換え」から、答の「よりかかり(脇息・座椅子)」を得る、という「なぞなぞ」である。

②連想

「問」から連想される事柄から「答」を得るものである。

(例) (問) 三位中将はなにゆゑに討たれたまふぞ (答) なら火ばち
これは、三位中将平重衡が、奈良東大寺・興福寺を火攻めにしたため、その罰を受けて、後に木津川の辺で斬罪に処せられたことを典拠として連想し、答の「奈良火鉢(奈良火罰)」を得る、という「なぞなぞ」である。連想には、このように、具体的な典拠から連想するものもあるが、そうでないものも含まれる。

(例) (問) ともし火きえなむとす (答) あぶらつき

これは、「灯火が消えようとする」という事柄から、それは油が尽き

たから、と連想し、答の「油杯(油尽き)」を得る、という「なぞなぞ」である。「連想」は、「言い換え」と連続的な部分があり、厳密な線引きが難しい場合もあるが、やはり発想の実際としては異なるものであると考え、別立てにしておく。

③操作

「問」の文字列をさまざまな方法で操作して「答」を得るものである。

(例) (問) 垣内の笹 (答) かさ、ぎ

これは、「かき(垣)」の「か」と「き」の間に「ささ(笹)」を挿入し、答の「かささぎ(鶺鴒)」を得る「なぞなぞ」である。最もパズルの要素が強いもので、さまざまな操作の方法が見られる。

以上、①②③の三つの発想法があるが、個々の「なぞなぞ」には、複数の発想法を組み合わせてできたものも多い。以下では、『なそたて』所収の「なぞなぞ」を、発想法により分類し、考察を加える。

三、『なそたて』所収の「なぞなぞ」の分類と考察

稿末の別表を参照されたい。この表は、『なそたて』所収の個々の「なぞなぞ」が、前節で設定した発想法のどれにあてはまるかを一覧したものである。注目すべき作り方になっているものは、漢字・数字・韻文・十二支の欄に特記した。これについては実例の説明の中で述べる。この表から、発想法の種類を集計した。

- ① 「言い換え」のみを使用するもの
- ② 「連想」のみを使用するもの
- ③ 「操作」のみを使用するもの

④ 「言い換え」と「連想」を使用するもの

⑤ 「連想」と「操作」を使用するもの

⑥ 「操作」と「言い換え」を使用するもの

⑦ 「言い換え」と「連想」と「操作」を使用するもの

理論上、以上の七種類が想定できる。また、①～③については、同じ発想法を何回使っているかも考慮して集計した。

集計結果は次頁の表である。この表からはさまざまなことが読み取れる。

○単独の発想法のみで作られたものが多い。

単独の発想法で最も多いのは③操作で、全体の三割以上を占めている。次に多いのは②連想である。①言い換えはそれほど多くなく、③操作の半数である。

このことは逆に、複数の発想法を組み合わせたものは少ないことを意味する。すなわち、④～⑦の合計は41例で、全体の21%に過ぎない。また、⑦の例は実際には存在しない。

数少ない④～⑥であるが、その中身を仔細に観察すると、⑤の組み合わせが特に少ないことが判る。「連想」と「操作」は相性が悪いのか、今後、他の「なぞなぞ」文献の様相と比較する必要がある。

○①言い換えと③操作は複数回用いられることが多い。

特に③操作は、二回以上用いられることが多い。これは、操作という手法がこの時代、特に好まれたことを示している。実際、さまざまな操作の手法がある。これは鈴木が指摘するように、連歌の賦物の技法を応用したものであろう。以下にいくつか実例を示す。

	合 計	1 回	2 回	3 回	4 回
①言	34 (17.3%)	15 (44.1%)	17 (50.0%)	2 (5.9%)	0 (0.0%)
②連	52 (26.5%)	44 (84.6%)	8 (15.4%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
③操	69 (35.2%)	26 (37.7%)	38 (55.1%)	4 (5.8%)	1 (1.4%)
④言・連	17 (8.7%)	—	—	—	—
⑤連・操	8 (4.1%)	—	—	—	—
⑥操・言	16 (8.2%)	—	—	—	—
⑦言・ 連・操	0 (0.0%)	—	—	—	—
合 計	196				

(注) 数値右の括弧内の%は最左欄の合計に対する百分率、数値下の括弧内の%は最下欄の合計に対する百分率。

(例)(問) 雪は下よりとけて水の上そふ (答) ゆみ

これは、「ゆき」の下の部分、すなわち「き」が溶けてなくなり「ゆ」が残る。これに「みづ」の上の部分、すなわち「み」が添って「ゆみ」が導き出される、という「なぞなぞ」である。問の中の文字列の一部を削るものである。

(例)(問) 海中(うみなか)の蛙(かへる) (答) つた

これは、「うみなか」を「卯巳の中間」と理解し、方角を十二支に当てはめて考えると「辰(たつ)」が得られる。この「たつ」を「かへる」でひっくり返して答の「つた(鳶)」を得るものである。方角を十二支で捉える操作と、逆から読むという操作を用いた「なぞなぞ」である。この例のように、十二支を用いた「なぞなぞ」は、別表の「十二支」欄に○印を付してある。

(例)(問) 十里の道を今朝帰る (答) 濁り酒

これは、「十」を九九の「二×五」と理解し、「にこり」を得る。次に「けさ」をひっくり返して「さけ」を得る。両者を繋いで答の「にこりさけ」を得る、というものである。数字が出てくる「なぞなぞ」は、九九や足し算として理解しなければならない場合が多い。この例のように、数字を用いた「なぞなぞ」は、別表の「数字」欄に○印を付してある。

(例)(問) 梅の木を水にたてかへよ (答) 海

これは、漢字「梅」の木偏の部分の水偏(氵)に変換する、という操作である。漢字を操作する「なぞなぞ」である。この例のように、漢字を用いた「なぞなぞ」は、別表の「漢字」欄に○印を付してある。

(例)(問) 秋の田は露重げなるけしきかな (答) 蛭

これは、「秋の田」から「ほ(稻穂)」を連想し、たわわに実った稻穂

は露がついてもその重みで「垂れ下がる」と連想する。まとめると「穂が垂れる」で答の「ほたる(蛭)」が得られる。有名な格言「実るほど頭を垂る稲穂かな」を連想させるが、こちらの「なぞなぞ」には特に教訓的な意味はなく、季節違いの蛭が導き出される可笑しさがあるだけである。この例のように、韻文の形式(和歌、連歌、その他)になっている「なぞなぞ」は、別表の「韻文」欄に○(和歌)・上(上句)・下(下句)・△(他)の印を付してある。

以上、『なぞなぞ』の集計結果から二点を指摘した。因みに、平安時代の「なぞなぞ」合せ(故小野宮右衛門督齊敏君達歌合)について同様の集計を行ったところ、次の結果を得た。簡略に示す。ここでも⑦の組み合わせは見られなかった。

- | | | | |
|------------|----|---------------|----|
| ① 「言い換え」のみ | 1例 | ④ 「言い換え」と「連想」 | 7例 |
| ② 「連想」のみ | 6例 | ⑤ 「連想」と「操作」 | 1例 |
| ③ 「操作」のみ | ナシ | ⑥ 「操作」と「言い換え」 | 1例 |

一見して「連想」が多い。ほとんど「連想」のみで成り立っていると言っても過言ではない様相を呈している。『なぞなぞ』では「操作」が多かったのとは対照的である。『故小野宮右衛門督齊敏君達歌合』には「操作」が関係する「なぞなぞ」は二例しかない。一つは先の例にも出した「東」から「卯」を導き出す操作である。もう一つは、履物並べたる祈りの師」という問から「くつくつほうし^{注8)}」という答を導き出すものである。「履物」から「くつ」を連想し、「並べたる」で「くつくつ」になる操作である。『なぞなぞ』で盛んに見られる複雑な文字列の操作は見られない。

四、おわりに

本稿では、発想法を基準として、極めて大雑把にはあるが、中世「なぞなぞ」本『なそたて』にみられる「なぞなぞ」を分類・考察した。その結果、以下のことが明らかになった。

① 単独の発想法のみで作られたものが多い。

この点については、特に「操作」によるものが多いことを指摘した。

② 「言い換え」と「操作」は複数回用いられることが多い。

この点について、特に「操作」は手法が複雑に発達していることを指摘した。

また、平安時代の『故小野宮右衛門督齊敏君達歌合』に見られる「なぞなぞ」の発想法とはかなり異なっていることも指摘した。

今後の課題として、今回検討した発想法を基準に、さまざまな「なぞなぞ」本の「なぞなぞ」を分類し、通時的・共時的に考察することが必要である。

その他、上述したように、江戸時代の「なぞなぞ」が孕む諸問題（二段なぞから三段なぞへの展開・言語文化の視覚化現象）についても究明する必要があると考えている。

(注)

1 『世界大百科事典』（平凡社一九八八）の「なぞ（謎）」の項（高橋康也執筆）には、さまざまな文化圏に「なぞなぞ」が存在することが指摘されている。また、本稿で取り上げた類の「なぞなぞ」が、日本では特に豊富にあることも指摘されている。

2 「なぞとことわざ」（『教育改造』昭和21年に連載・本稿は講談社学術文庫『なぞとこ

とわざ』講談社一九七六による）

3 『なぞの研究』（東京堂出版一九六三・引用は講談社学術文庫一九八一による）、『中世なぞなぞ集』（岩波文庫一九八五）など。

4 『ことば遊びの文学史』（新典社一九九九）。

5 『江戸川女子短期大学紀要』第九号・一九九四年三月。

6 第一三七段（『枕草子』新編日本古典文学全集18・小学館一九九七）

7 『平安朝の謎合と謎―故右衛門督斎敏君達謎合』（『平安文学研究』22・一九五八年一月）。

8 「つくつくばうし」は、『日本国語大辞典 第二版』「つくつくばうし」の語誌欄によると、「平安時代にはクツクツホウシ（ポウシ）と呼ばれていたようである。（後略）」とある。

※引用した古典籍のテキストは以下の通り。

・ 萬葉集：新日本古典文学大系（岩波書店一九九九―二〇〇三）

・ 故小野宮右衛門督齊敏君達歌合：日本古典文学大系（岩波書店一九六五）

・ 徒然草：日本古典文学大系（岩波書店一九五七）

・ 宣胤卿記：増補史料大成44（臨川書店一九六五）

「なそたて」(岩波文庫)

No	発 想	漢字	数字	韻文	十二支
1	連想・言換			上	
2	言換・言換				
3	操作・言換			下	
4	操作・操作				
5	言換・言換			○	
6	言換・言換			○	
7	言換・操作			○	
8	操作・操作			○	
9	言換・連想			○	
10	言換・言換・言換			○	
11	連想・連想			上	
12	操作・言換			下	
13	連想・連想				
14	操作	○			
15	言換・言換				
16	操作・言換			下	
17	連想				
18	操作・操作				
19	操作・操作		○		
20	操作・操作	○			
21	操作・操作		○		
22	操作				
23	操作	○			
24	操作	○			
25	操作	○			
26	操作・操作	○			
27	操作	○		下	
28	操作・操作	○			
29	連想				
30	連想				
31	連想				
32	操作				
33	連想				
34	連想				
35	言換				
36	連想・連想				
37	連想				
38	言換				
39	言換				
40	連想				
41	連想・言換				
42	操作・操作				○
43	連想				
44	連想				
45	言換・操作・言換				
46	操作・操作				
47	操作・操作				
48	連想・連想				
49	連想				
50	連想				

No	発 想	漢字	数字	韻文	十二支
51	連想				
52	言換・言換				
53	操作・言換				
54	言換・言換				
55	連想				
56	操作・操作		○		
57	連想・言換				
58	連想・言換				
59	連想・言換				
60	連想・言換				
61	言換				
62	言換				
63	言換				
64	言換				
65	言換・言換				
66	連想			△	
67	操作・操作				
68	言換				
69	言換				
70	操作・言換			上	
71	言換・言換・言換				
72	連想・操作		○		
73	言換				
74	言換・言換				
75	連想				
76	連想				
77	言換・操作		○		
78	言換・言換				
79	連想				
80	言換				
81	言換				
82	言換・言換				
83	言換・言換				
84	操作・操作	○			
85	言換				
86	操作				
87	連想				
88	操作・操作				
89	連想				
90	言換・言換				
91	連想・言換				
92	連想・連想				
93	連想				
94	操作			下	
95	操作・言換				
96	操作				
97	操作				
98	連想・連想				
99	連想				
100	連想				

「なそたて」(岩波文庫)

No	発 想	漢字	数字	韻文	十二支
101	言換・言換				
102	言換・言換				
103	連想				
104	連想				
105	操作・操作				
106	連想・言換			下	
107	操作・連想	○		上	
108	連想				
109	言換・言換			上	
110	連想				
111	操作・連想		○		
112	言換・言換				
113	連想				
114	連想				
115	操作				
116	操作			下	
117	言換・操作・操作				
118	操作・連想				
119	操作				
120	操作				
121	操作・言換				
122	操作・操作			下	
123	操作・言換				
124	言換・連想			○	
125	言換			○	
126	操作・操作			○	
127	操作・操作・言換			○	
128	操作・操作			○	
129	連想・言換				
130	連想・連想				
131	連想				
132	操作・言換			上	
133	連想・言換				
134	操作・連想				○
135	操作・操作			上	
136	連想			○	
137	操作	○			
138	操作・操作			下	
139	連想				
140	連想・言換				
141	言換・言換				
142	連想				
143	連想・連想				
144	操作・操作	○		○	
145	操作				
146	操作・操作				
147	操作・操作	○			
148	操作・操作				
149	操作・操作				
150	操作・操作・言換				

No	発 想	漢字	数字	韻文	十二支
151	連想・連想・言換				
152	操作・操作・操作				
153	操作				
154	操作	○			
155	操作・操作				
156	連想・言換				○
157	連想				
158	連想				
159	連想				
160	操作・操作				
161	連想				
162	連想				
163	連想・言換				
164	操作		○		
165	操作				○
166	言換・連想・連想				
167	連想				○
168	言換				
169	操作・操作				
170	操作・操作・連想	○			
171	操作・操作				
172	操作・操作				
173	操作・操作				
174	操作	○			
175	操作				
176	操作・操作・操作			○	
177	操作・操作・操作・操作				
178	操作・連想・操作				
179	操作・操作・操作	○			
180	操作・操作	○			
181	操作・操作				
182	操作・操作・操作				
183	操作	○			
184	操作・言換・操作		○	○	
185	連想				
186	操作				
187	操作	○			
188	操作・操作			下	
189	操作・連想				○
190	操作・操作				
191	連想				
192	連想			○	
193	連想			上	
194	操作・操作				
番外 1	操作・操作				
番外 2	連想				

言換…等価の表現

連想…典拠がある／等価でない言い換え

操作…文字列・漢字・数字・十二支の操作